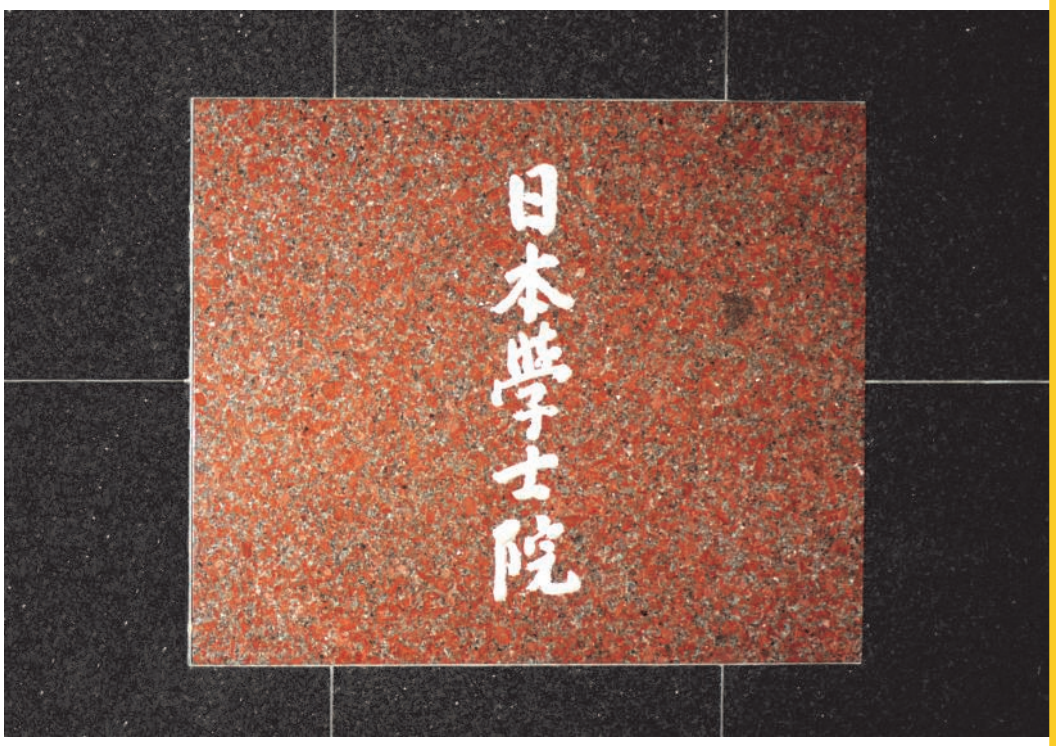
THE JAPAN ACADEMY
2012.10.1
発行：年2回
（4月、10月）
NO. 10
NEWSLETTER

日本学士院ニュースレター

明六社だより

トピックス：

- 第102回日本学士院賞受賞者に受賞の感想を書いていただきました
- 第７回日韓学術フォーラムを開催しました
- 佐々木惠彦会員より寄稿いただきました
- 秋の公開講演会を開催します



表札

昭和49（1974）年5月に竣工した日本学士院会館の玄関右手に掲げられている。「日本學士院」の題字は、会館建設当時の日本学士院長であった南原繁会員の揮毫による。南原繁会員は政治学者で、戦後初の東大総長を務めた。南原会員は竣工直前に亡くなり、題字はその絶筆となった。大内兵衛会員が捧げた追悼の辞には、「南原君は、その輝しい人生の最後を、（中略） この日本学士院の建築の完成にささげようとしていた。彼によれば、日本の学術は、何が何であっても、世界の平和のためにあるべきものであった。学士院のこの殿堂もまたその理想のためにのみあるのであった。」と記されている。

目次：

第102回日本学士院賞授賞式	2
学士院の歩み	5
第56回公開講演会レポート	6
第7回日韓学術フォーラム	6
所蔵資料の紹介（渋川春海）	7
会員寄稿（佐々木惠彦会員）	8
会館施設の利用案内	9
第57回公開講演会のお知らせ	10
寄附のご案内	10
学びのススメシリーズ講演会のお知らせ	11
外国アカデミー等との交流	11
会員・客員の逝去	12
会員の著書紹介	12
編集後記	12

第102回日本学士院賞授賞式

天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ、日本学士院は第102回授賞式を平成24年6月4日(月)に日本学士院会館(東京・上野公園)で挙行いたしました。本年は、恩賜賞・日本学士院賞2件、日本学士院賞7件に加えて、2年に1度授与する日本学士院エジンバラ公賞1件、計10件11名の方々に授賞しました。

－恩賜賞・日本学士院賞－

吉川一義(京都大学名誉教授)
難波啓一(大阪大学大学院生命機能研究科教授)

－日本学士院賞－

中西　聡(名古屋大学大学院経済学研究科教授)
梶田隆章(東京大学宇宙線研究所長・教授)
髙柳邦夫(東京工業大学特任教授・名誉教授)
木村　孟((独)大学評価・学位授与機構特任教授・名誉教授、東京工業大学名誉教授、東京都教育委員会委員長)
佐藤文彦(京都大学大学院生命科学研究科教授)
熊谷英彦(石川県立大学特任教授・名誉教授、京都大学名誉教授)
二井將光(岩手医科大学薬学部長・教授、大阪大学名誉教授)
坂口志文(大阪大学免疫学フロンティア研究センター教授)

—日本学士院エジンバラ公賞—

塚本勝巳(東京大学大気海洋研究所教授)

第102回受賞者と文部科学副大臣、日本学士院役員

受賞者と学士院会員

研究資料に見入る来賓

授賞式開会

本年の受賞者から

受賞作『プルーストと絵画芸術』について

吉 川 一 義

天皇皇后両陛下に研究内容を説明する
吉川受賞者

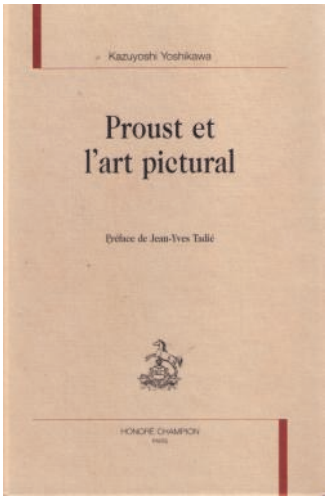
吉川受賞者と学士院会員

今回、恩賜賞・学士院賞を受けたのは、パリのシャンピヨン書店から2010年に上梓した*Proust et l'art pictural*（プルーストと絵画芸術）という約400頁のフランス語刊本である。たまたまフランスでアカデミー・フランセーズの学術大賞（プルースト研究の全体が対象）を受賞したり、カブール=バルベック文学サークルの文学賞を授与されたりした著作が、日本で学界最高の評価を与えられたことは身にあまる光栄というほかない。

本作は、プルーストの長篇小説『失われた時を求めて』において言及され暗示され隠されている多数のヨーロッパ名画を正確に同定し、その作中での役割をさまざまな調査と論点から考察したものである。いちばん苦労したのは、プルーストが問題の画をどの美術館や個人コレクションや画集で見ていたのか、それらの画がどのように作中に採りこまれたのか、これまで等閑視されていた文学と美術との接点を具体的に明らかにすることだった。

その際、思いがけず役に立ったのは、絵画の調査とはまるでべつの目的だったが、十数年前に日本のプルースト研究者40名と共同で作成したフランス語版『プルースト書簡集総合索引』（京都大学学術出版会）や、駆け出しのころに『失われた時を求めて』の未発表草稿帳を解読して小説の成立過程を調査した経験だった。そういえば二十代後半にヨーロッパ各地の美術館や教会を訪れて憧れの名画を見たのも、当時の研究とはおよそ無縁の趣味だった。いや、そもそも『失われた時を求めて』と出会ったのも、理科志望の病弱な少年だった私がかけがえのない楽しみとした文学濫読の結果にすぎない。こうしてふり返ってみると、研究の成果といえども、夢中で楽しんだ趣味の残滓かと思える。文学の研究など道楽者の趣味ではないかと言われると、自分の経験に照らしてその通りと認めざるをえないが、しかしどんな分野の研究にも、そんな道楽の一面があるのではないか。

『失われた時を求めて』のような古典になると、ただ読めばわかるというものではなく、本文がなるほどと腑に落ちるには、その基盤をなす古今の文学や芸術に関する文献学的調査が不可欠になる。現在、岩波文庫から刊行中の『失われた時を求めて』の拙訳に、作品の理解を助ける多数の注や図版が掲載されているのも、受賞作を中心とするこれまでの研究成果のおかげである。文学の研究はどうやら趣味から始まるようであるが、その結果、人類の知的遺産を深く理解してそれを万人の財産にするという、いくぶん趣味を越えた役目も果たせるのかもしれない。



Proust et l'art pictural, Paris, Honoré Champion, 2010。本書は、吉川氏が日本語で刊行した2冊の単著（『プルースト美術館』筑摩書房、1998年9月；『プルーストと絵画』岩波書店、2008年2月）を総合して、全面的な補充改訂を加えたフランス語版である。

ロイヤルメール

塚 本 勝 巳

長い夏の研究航海から戻ると、一通の外国郵便が来ていた。封筒の赤い消印には「ROYAL MAIL」とある。さらによく見ると「BUCKINGHAM PALACE」のスタンプもある。「もしや」と思い、丁寧に封を開けてみる。はたしてエジンバラ公からの手紙であった。「WINDSOR CASTLE」とか「my Award」、「Japan Academy」などの文字がつぎつぎに眼に飛び込んでくる。そして最後に大きく、「Yours sincerely Philip」と優雅な直筆サインまであるではないか。

この度、多くの方々のご尽力により、日本学士院エジンバラ公賞の栄誉に浴した。しかし今夏は、5、6、7月と3ヶ月間に亘って大きな研究航海が続いたので、この間ほとんど海の上だった。したがって、6月4日の授賞式とそれに続く宮中お茶会、文部科学大臣主催の晩餐会も、寄港地のパラオから単身、一時帰国して参列することになった。全てが初体験のめまぐるしい一日がなんとか無事終わり、その翌日にはパラオで待つ研究船に戻った。

パラオ出港後、陸からメールがきた。洋上からエジンバラ公に授賞のお礼の手紙を出すことになった。しかし、ここにはレターヘッド付きの公式便箋も無ければ、郵便を出すポストも無い。それに自筆サインだって要る。船で使えるのはインマルサット衛星経由の電話、ファックス、それに限られた容量のメールである。これらを駆使して、正式な手紙を英国王室に送るのである。粗相があってはならない。いささか緊張した。

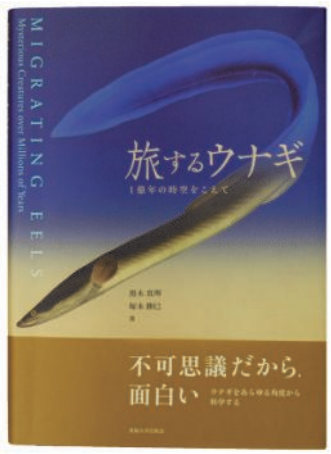
船に送っていただいたお礼の手紙のひな形を参考に、文案を作る。奇しくも今年5月頭、英国エジンバラで4年に1度の世界水産会議があり、その開会式において、エジンバラ公ご子息のチャールズ皇太子が持続的漁業と自然保護について講演されたこと。そしてそのあと、同じ会場で私が基調講演を務めたこと。また、絶滅危惧種にもなりつつあるウナギと人の豊かな関係や研究者の保全活動についても書いた。

何度も推敲し、できたものを陸にメールで送り、正式な高級便箋にプリントアウトしてもらう。それを日本学士院事務局を通じて英国に郵送するのだが、その際、拙著「Eels on the Move」(日本語版「旅するウナギ」東海大学出版会，黒木真理・塚本勝巳著、2011）も、お礼の手紙に添えて、英国に送っていただいた。この本は、ウナギの生物学の最前線とウナギにまつわる文化、保全問題、社会経済などを、一つの大判写真集の形に取り纏めた美麗本。自然保護の趣旨をもつエジンバラ公賞と今回の受賞課題「魚類の回遊現象に関する基礎研究 ― とくにウナギの回遊機構の発見」によくマッチするのではないかと思ったからだ。午後のお茶の時にでも、パラパラ眺めてもらえはしないかと小さな期待もあった。

冒頭の書簡は、こんなお礼の手紙に対するエジンバラ公からの返信だった。よもやお返事をいただけようとは思いもよらなかったので、喜びよりも、まず驚き。今、この手紙を銀座の文具屋に持ち込み、額装してもらおうかと思ったりしている。そして今また、海洋生物の保全と資源保護についてかなり具体的に突っ込んだコメントのある、このご返信に対し、さらにお返事を差し上げてよいものかどうか、大いに悩んでいるところである。

院長から賞を受ける塚本受賞者

研究資料を前にして



黒木真理・塚本勝巳
『旅するウナギ　1億年の時空をこえて』
東海大学出版会、2011年

授賞理由等の詳細は、日本学士院ホームページをご覧ください。
http://www.japan-acad.go.jp/

学士院の歩み　第3回　帝国学士院への改組

日本学士院は、明治6(1873)年に結成された近代的啓蒙学術団体である明六社を源流として明治12(1879)年に創設された東京学士会院を前身とします。東京学士会院は、明治39(1906)年に帝国学士院に改組し、昭和31年に現在の日本学士院の形となりました。

このコーナーでは、130年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介します。第3回は「帝国学士院への改組」です。

明治12(1879)年に成立した東京学士会院は、その責務の重さとは裏腹に、政府から十分な支援を与えられず、予算だけをみても、設立当初は8,000円台であった年度予算額が徐々に減少し、明治29(1896)年度には1,200円台まで落ち込む。状況を打開するため何度も新たな事業を起こす提案が行われてきたが、それはほとんど不可能になりつつあった。一部の新聞からは「学士会院廃すべし」の声さえ上がるようになり、開院十数年で命脈を脅かすような大きな危機を迎えることになってしまったのである。

こうした事態を打開するために、それまでの部分的改良案とは異なる根本的な改革案が加藤弘之会員から提出された。それは、この際、西洋のアカデミーに伍する国立アカデミーとしての機能が果たせるよう脱皮する必要がある、というものであった。東京学士会院創設以来の予算の縮小傾向から見ても、また、格段に進歩してきた学校教育・学界の実状に対応するためにも、現状ではアカデミーとして必要な役割を果たすことができないことは明白だった。

この提案は会員全員の賛意を得て、第2次伊藤内閣文部大臣・西園寺公望宛に提出された。文部省もこの案をほぼ受け入れ、さっそくベルギー、ドイツ、イギリス、ロシア、イタリアといった国々のアカデミー規則書等を収集している。

日清戦争後、東京の帝国大学の他に、新しい帝国大学として京都帝国大学(明治30(1897)年)が開設され、さらに日露戦争後には東北帝国大学(明治40(1907)年)、九州帝国大学(明治43(1910)年)などの教育研究機関が徐々に充実してきた。また、各種の専門学会が創設されるなど、学問全般で飛躍的な発達がみられるようになってきていた。とくに自然科学分野の進歩にはめざましいものがあり、東京学士会院設立当初の会員は和漢洋を含めた人文社会学に関する学者が多くを占めていたのに対して、このころには自然科学分野の学者が増えてきていたのである。国立アカデミーへの脱皮は、学界全般の進歩と歩調を合わせた提案でもあった。

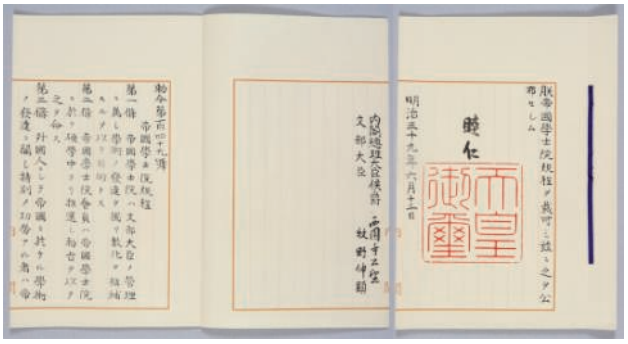
こうした機運にさらに拍車をかけたのが、万国学士院連合会(Internationale Assoziation der Akademien)への加入問題である。

万国学士院連合会は、明治31(1898)年に、欧米諸国のアカデミーが連合して世界の学術の発展に寄与しようという目的で設立された国際団体である。明治38(1905)年初頭、エドアルト・ジュース連合会長が、在ウィーン特命全権公使・牧野伸顕を通して東京学士会院に連合会への加盟を打診してきたのである。東京学士会院はただちにこの誘いを受け入れ、その旨を文部省に伝えるとともに、会院規程改正案の作成も進めていった。

明治39(1906)年2月、帝国議会に提出された東京学士会院組織拡張予算案は議会両院を通過し、それまでの1,885円から10,880円へと大幅な増額予算が成立した。そして同年6月12日、「帝国学士院規程」の公布にともなって、東京学士会院は帝国学士院へと生まれ変わることとなったのである。

7月8日の臨時総会では、互選によって初代帝国学士院長にドイツ学者の加藤弘之が選出された。加藤は東京学士会院の抜本的な改革案を提案した本人であり、明六社の会員、東京学士会院設立の中心になったメンバーでもあった。東京学士会院がフランスのアカデミー・フランセーズを模範にしているのに対し、帝国学士院はドイツのアカデミーをモデルにしていると言われる。

初代帝国学士院長
加藤弘之



帝国学士院規程ご署名原本
(国立公文書館蔵)

講演会レポート

（上）講演する三宅会員
（下）講演する益川会員

第56回公開講演会

平成24年5月26日（土）に日本学士院第56回公開講演会を、同志社大学との共催により、同大学今出川キャンパス 明徳館1番教室において開催しました。講師の三宅一郎会員は「投票参加の政治学理論」と題し、また益川敏英会員は「現代社会と科学」と題してそれぞれ講演を行いました。

三宅会員は、最近の国政選挙における実例を挙げ、政治学における投票参加研究をわかりやすく整理し、紹介しました。聴講者からは、「資料も板書もあり、丁寧でわかりやすかった。」「合理的選択理論の話が聞けて良かった。」等の感想が多く寄せられ、好評を博しました。

益川会員は、科学の発展の経緯を具体例を挙げて説明し、科学の発展には、時間と巨額の経費が必要であることを話しました。聴講者からは、「科学における基礎研究の重要性がよくわかった。」「勉強したいと思ったことにもう一度挑戦したいと思った。」等の感想が寄せられました。講演終了後には、多数の学生に囲まれ熱心な質問に答えていました。

本講演会は13時に開会し、16時10分に全ての日程を終了し、盛会の裡に幕を下ろしました。

第7回日韓学術フォーラム

（上）本院議場にて
（下）フォーラムの模様

大韓民国学術院との共同事業として始まった日韓学術フォーラムは、本年第7回を迎え、平成24年9月25日（火）～27日（木）の3日間、東京で開催されました。フォーラムには大韓民国学術院から朴煐植会長を始め11名の会員が来日し、本院会員及び報告に関わる分野の研究者等を合わせて約60名の参加がありました。

大韓民国学術院会員等は来日後、まず東京大学濱田純一総長を表敬し、その後、同大学韓国朝鮮文化研究室において教員や韓国等からの留学生等と懇談を行いました。夕刻には学士院を訪問、学士院会員と和やかに歓談、旧交を温めました。

翌26日（水）には、学士会館（神田）を会場として、4名の会員から次のように報告が行われ、日韓両国学士院会員等の間で意見交換が行われました。

報告1： 上田誠也（日本学士院会員、地球物理学）
「3.11 東日本大震災と日本の地震予知」
報告2：金洙鎭（KIM, Soo Jin）（大韓民国学術院会員、地質学）
The Roles of Minerals in Environmental Changes
報告3：藤田昌久（日本学士院会員、都市・地域経済学（空間経済学））
「震災後の日本経済と東アジア協力の将来」
報告4：朴光淳（PARK, Kwang Soon）（大韓民国学術院会員、経済学）
「韓国社会の両極化は深化しているのか —所得・賃金格差の動向—」

最終日の27日（木）、大韓民国学術院会員の希望により、駒込の東洋文庫を訪問し、本院の斯波義信会員より文庫内の案内及び韓国・朝鮮に関わる貴重資料の閲覧や説明を受けました。

所蔵資料の紹介（渋川春海）

このコーナーでは、本院が所蔵する貴重図書・資料についてシリーズで紹介します。

第10回は「渋川春海」を取り上げます。

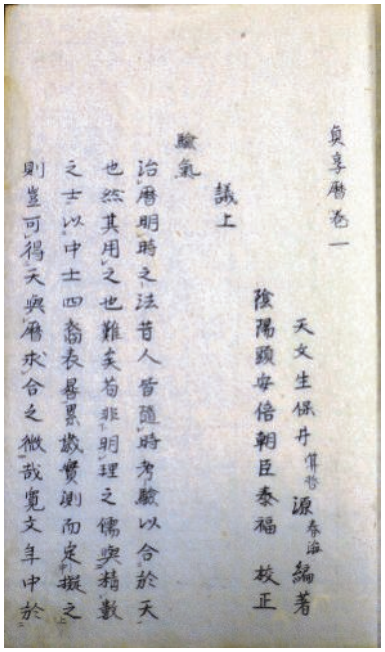
多くの文学賞を受賞し映画にもなった冲方丁氏の人気小説『天地明察』は、江戸時代の天文家で碁の棋士でもあった渋川春海（安井算哲）（1639-1715）の活躍を描いている。

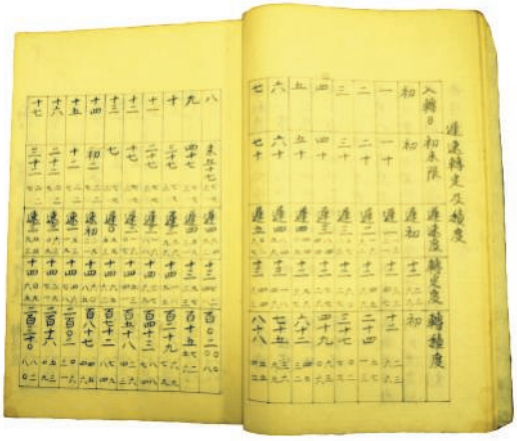
日本の暦は、平安時代の貞観4（862）年より800年以上、中国で作られた宣明暦を用いていたが、日食の予報を外すなど、不具合が目立っていた。春海は、元朝の授時暦をもとに推算した独自の暦を作成した。勅許によりこの暦が採用（改暦）され、貞享暦と呼ばれた。春海はこの功により幕府より初代天文方に任命された。

日本学士院には、20,000点を超える江戸時代の数学書である和算書のコレクションがあり、その中に春海に関する資料も収められている。

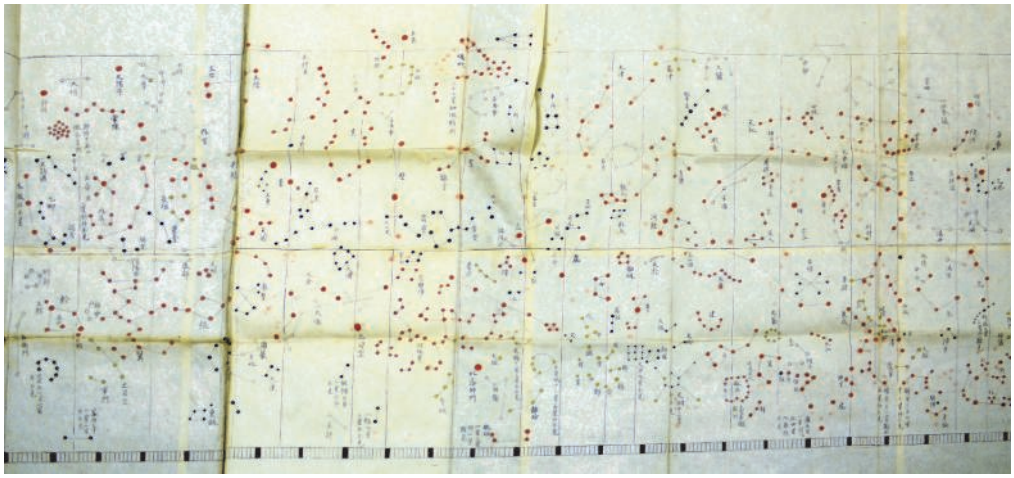
ここで紹介するのは、貞享暦（全7冊）に加え、神武天皇の時代からの日本の暦をまとめた『日本長暦』、従来の星座の配置に独自の配置を加えた天文図『天文成象』（子の昔尹（ひさただ）の名で刊行）である（いずれも写）。

春海の業績は、中国伝来の暦をそのまま用いるのではなく、日本向けに独自に改良したことに意義がある。この後、天文の研究は西洋の天文学の研究成果も踏まえ大きく発展した。春海は、それらの業績の源流に位置し、わが国独自の暦術の祖と言える存在である。

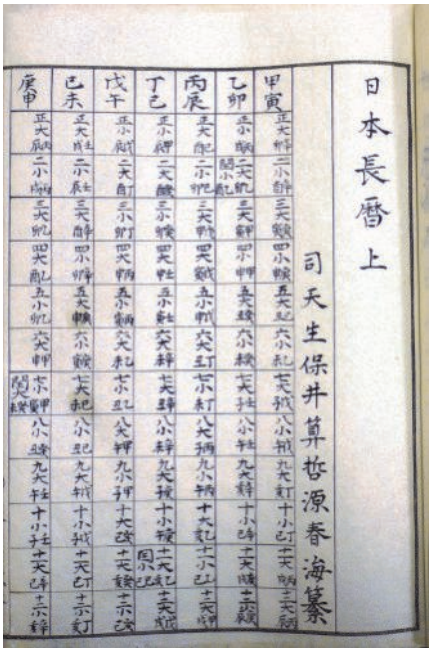




貞享暦（貞享元（1684）年）（上・左）



天文成象（元禄12（1699）年）



日本長暦（貞享2（1685）年）

（会員寄稿） 熱帯降雨林における経験

1974年から3年間、マレーシアの森林研究所に派遣され、熱帯林樹種の生理研究を行ったことが熱帯林研究の始まりであった。この研究所はイギリス統治時代に作られ、600ヘクタールの熱帯降雨林に囲まれている。

フタバガキ科の林は美しい樹冠模様を作り、小さな木漏れ日があるだけで、林床は薄暗く、下草は少なく、林内光の研究に適した林であった（写真１）。赤道直下では日中太陽の位置が高く、頭上に何か遮蔽物があると太陽の光は遮断され暗くなる。林の中も同様である。葉の透過光、樹木の反射光、青空の散乱光の一部などが林内散光であり、散光は林内の日陰の明るさである。葉の葉緑体が赤い光波長を吸収するため、林内散光には赤い光波長が少なく、遠赤色光（700nm～760nm）の比率が高い。赤色光と遠赤色光はフィトクロムに作用し、形態形成を制御している。特に遠赤色光は林内に落ちた種子の発芽を抑え、林内に育つ稚樹の葉を薄くし、茎を徒長し、根の発達を抑える。このため林内の稚樹は脆弱になる。

一方、葉と葉の間を通って林床に達する太陽光は木漏れ日または光斑とも言う。光斑の光波長は青色光から赤色光まで殆ど同じ強さを持っている。光斑には光合成に必要な赤い波長（600nmから700nm）が含まれ、光斑が多い林ほど明るく、樹や下草の生長が良い。樹冠層が厚く、林内が暗くなるほど、光斑は少なく、その光も弱い。間伐し、強い光斑を導入すると、赤い光波長によって種子発芽が促進され、稚樹が健全に生長し、天然更新を行うことができる。天然更新は林の中に落ちた種子の発芽を促進させ、発芽した幼苗を生長させ、次世代の林を作ることであるが、林内においては、発芽とか幼苗の生長は難しく、人の技術で発芽、生長を促進することが必要である。アマゾンにおいて、間伐によって、林内を明るくし、散光の明るさのレベルを上げ、光斑を多くすることによって、マメ科の *Cedrelinga* の天然更新を行った。（写真２）。

熱帯地域では苗畑にも光の問題がある。日光が強すぎると考え、苗畑に大きな木を植え、苗木の日覆とするのが一般的であった。このような苗畑では、林内と同様、赤い光が少なく、遠赤色光

写真１　マレーシア森林研究所のカプール（*Dryobalanops aromatic*）人工林。植栽後、50数年経過し、天然林の様な林になっている。樹冠層のモザイック模様が美しい。

写真２　トルニーヨ（*Cedrelinga catenaeformis*）の天然更新。アマゾンのペループカルパ周辺の試験地。種子が発芽した直後の光条件を改善し、散光のレベルを上げ、幼苗の生長を促進し、天然更新させた林。

佐々木惠彦　会員
（第2部第6分科）

昭和10年、東京都生まれ

東京大学卒業。ウィスコンシン大学研究員、ミズリー大学研究員、農林水産省林業試験場研究員、同造林科長を経て、昭和62年東京大学農学部教授。東京大学農学部長、日本大学生物資源科学部長、日本学術会議副会長等を歴任。東京大学名誉教授。平成18年7月に日本学士院エジンバラ公賞を受賞。平成18年12月から日本学士院会員。

写真３　（上）大きな木を植え、光を弱めた苗畑。木の下にある苗木が徒長しているのが分かる。（下）上図の苗畑で起こった徒長現象。苗の下の葉から、右手で持っている葉まで、節間であり、葉は形成されない。

が多く、徒長した弱い苗木しかできない。日覆の木をなくし、赤い光の多い条件で苗を育て、移植に強い苗木を作った（写真3）。

パイライト（FeS_2）由来の酸性硫酸塩土壌は、強硫酸によって金属イオンを溶脱し、貧栄養の白い砂地となるのが特徴である。パイライトは湿地、隆起台地、石炭層の地中に存在し、はじめはアルカリ性であるが、露出すると大気中の酸素に酸化され、ゆっくりと強酸性へ変化する。バクテリアが介在するとパイライトは極めて急速に酸性化する。この酸化過程の初期にはマンガンなどの重金属イオン過剰障害が起るが、そのあと、金属イオンの欠乏症、リン酸やモリブデンの過少障害に変化し、最終的には粘土鉱物が破壊され、アルミニュウム過剰障害が起こる。しかし、自然界には、硫酸に対する色々な適応現象が存在する。強酸性化した土壌に生息するバクテリアは植物の根系にバイオフィルムを形成し、強酸性土壌における植物の生育を助けるものがある。植物にもアンモニアを排出し、酸性硫酸塩土壌に適応しているものがある。システイン合成酵素の活性が高く、硫酸に対する耐性を持つ植物が存在する。高濃度のアルミイオンが生長に適している樹種もある。特に、フタバガキ科の*Shorea roxburghii*は荒廃地修復に適した樹種であり、種子ばかりでなく、挿し木、組織培養によっても増殖する。苗は乾燥に強く、裸苗の植栽が可能である。pH3の土壌に生育できるほか、山火事の後には根から根萌芽して再生する。

いま、大きな問題は石炭の露天掘りである。森林の表土を残して、森林を再生することが義務付けられているが、大規模な露天掘りでは、表土を残すことが不可能である（写真4）。このため、酸性硫酸塩土壌に直植栽できる技術が必要であり、酸性硫酸塩土壌に適応した植物、菌根菌、共生菌、バクテリアなどの利用技術を発展させなければならない。特に、*S. roxburghii*に期待したい（写真5）。

さらに、パイライトや硫黄が古い生物のエネルギー源であったことを考えると、今後の研究には、極限環境に生存する生命体の適応機構の研究が重要になると考えている。

写真4　インドネシアの石炭露天掘りの現状。元の森林は完全に破壊され、土壌は攪乱され、表土はどこにも存在しない。この1鉱区で、数万ヘクタールの露天掘りを行い、森林は消滅している。

写真5　石炭層が露出した土壌(pH3)で生育する*Shorea roxburghii*。数年後には樹高2mになった。樹冠で陰ができる場所に下草が侵入し、しだいに植生を回復する。

会館施設の利用案内

建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品と機能性を備えた建物となっています。館内には、議場のほか大小六つの会議室等があります。

本施設をご利用になりたい方は、庶務係までお問い合せください。

日本学士院会館総会議場

（平成24年4月以降の会館利用状況）

利用年月日	利　用　目　的　・　内　容
平成24年　8月　7日	日本機械学会機械遺産認定表彰
平成24年　8月28日	「エリザベス朝演劇研究会」例会
平成24年10月　7日	第5回加藤山崎教育基金贈呈式
平成24年11月16日	第12回山崎貞一賞贈呈式

第57回公開講演会のお知らせ

平成24年10月27日（土）午後2時～5時10分 、第57回公開講演会を日本学士院会館において開催します。

藤田昌久会員は「都市の発展と文化 ―江戸・東京をめぐって―」、内田祥哉会員は「日本建築の保存と活用」と題してそれぞれ講演を行います。

都市の発展と文化　―江戸・東京をめぐって ―

藤 田 昌 久　会員

都市はどのように生まれ、発展していくのだろうか。交通や情報通信技術の発達とともに都市は発展するのだろうか、それとも衰退するのか。たとえば、1964年に東京－大阪に新幹線が開通して以来、東京はますます大きくなり、大阪は衰退の傾向にある。また、国際的に見れば、グローバル化の進展とともに、従来型の生産活動を新興国に奪われて衰退している都市も多いが、東京のように「知識創造の場」として、新たな発展を続けている都市も少なくない。なぜだろう。

講演では、これらの疑問に答えるために、近世以降における江戸・東京を中心とする日本の都市の発展について、世界の都市と比較しながら考えてみたい。結論として、江戸・東京は、日本中・世界中の多様な知と文化を吸収、融合し、新たな知と文化を創り上げる坩堝の役割を果たしてきたことが浮かび上がればと思う。

日本建築の保存と活用

内 田 祥 哉　会員

日本の古建築は殆どが木造で、地震・台風はもとより、四季の厳しい気象条件に晒されてきた。その維持保存に対する考え方は、法隆寺、大阪城、伊勢神宮に代表されると云われる。

他方、現代の日本建築には、鉄骨造、鉄筋コンクリート造などがあり、その殆どは、戦後に建てられたため、これまで、維持保全については、あまり考えられてこなかった。ところが建築物の長期利用に伴い、社会の変化に見合った性能向上、用途変更などが求められるようになり、建物の長期維持とともに、活用のための技術が、急速に発達している。

この講演では、木造ではぐくまれた日本人の考え方を説明し、建築の保存と活用のための最近の事情を、上野の建築物も実例に挙げて紹介したい。

※事前申込制・
先着150名。
お車での来場はご
遠慮ください。

お問合せ先
日本学士院　公開講演会係
〒110－0007
東京都台東区上野公園7-32
TEL：03-3822-2101
FAX：03-3822-2105
E-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp
Web: http://www.japan-acad.go.jp/

寄附のご案内

民間企業、団体、個人等から広く寄附金を受け入れ、学術の振興に資する事業を実施しています。金額の多少にかかわらず趣旨に賛同される方々からのお申し出をお待ちしています。なお、本院への寄附金は国に対する寄附金として、寄附者が個人の場合は、所得より「寄附金控除」の適用を受け、法人の場合は、「寄附金損金算入」の特例が適用されます（関係法令：所得税法第37条第3項第1号）。 詳細については、会計係までお問い合せください。

受入年月（平成24年度受入実績）	個人・団体名
平成24年　5月	英国・エジンバラ公フィリップ殿下
平成24年　5月	山﨑舜平氏
平成24年　7月	公益財団法人原田積善会

学びのススメシリーズ講演会のお知らせ

日本学士院学びのススメシリーズの講演会は、平成20年に第1回を開催し、今回で第5回となります。本講演会は、様々な分野で素晴らしい研究を重ねてきた日本学士院会員が、日本の将来の担い手となる子どもたちに知ることのおもしろさ、学ぶことの楽しさを知ってもらう一助になればという思いから企画されました。

日時：　平成24年12月8日（土）午後2時～　　**対象：中学生・高校生・一般**

「ナノサイエンスとナノテクノロジー
—カーボンナノチューブの発見からその産業応用— 」

飯　島　澄　男　会員

日本の産業は「ものつくり」が基本です。その中心には新素材の「開発」がありますが、新素材の開発では現在し烈な競争が世界規模で進行中です。本講演では、その一例として、「カーボンナノチューブ」を取り上げ、その発見、学問としての魅力、そして産業応用への研究開発について紹介します。

カーボンナノチューブは、ダイヤモンド、炭、鉛筆の芯と同じ炭素原子からできていますが、その大きさが「ナノメートル・サイズ」であること、また円筒形であるために通常の炭素材料とは違った性質を示します。そのため「ナノサイエンス」と「ナノテクノロジー」研究の中心的存在になっています。この分野の研究ではノーベル賞がすでに2回も与えられるほどです。

外国アカデミー等との交流

ロンドン王立協会を始め、10カ国11機関と交流協定を結び相互訪問等を実施するほか、海外の学術団体等との学術交流を促進しています。

肩書、会議名等		会員等氏名	期間
受入	日本国際賞受賞者	Janet D. Rowley博士 Brian J. Druker博士 Nicholas B. Lydon博士 佐川眞人博士	H24.4.24
	清華大学教授 米国アカデミー会員 日本学士院客員	楊振寧博士夫妻	H24.5.8
	UAI事業関係 （日露関係史料をめぐる国際研究集会）	Aleksandr Sokolov博士 Sergei Cherniavskii博士 Vadim Klimov博士	H24.5.25
	第7回日韓学術フォーラム （大韓民国学術院・日本学士院学術共同事業）	朴煐植会長、金鍾源、金洙鎭、朴光淳、尹起重、鄭基俊、張浩完、金學主、金勇一、高翔龍、李鎬汪（会員）、金銀淑夫人、片京範（事務局長）、徐福源、張裕淋（事務官）	H24.9.25～9.27
派遣	国際学士院連合第86回総会 （ニューデリー）	青柳正規会員	H24.1.22～1.28

会員・客員の逝去

平成24年4月以降、以下の方々が逝去されました。

＜会　員＞

森　　亘会員（第7分科・病理学）	平成24年4月1日	享年86歳
外村　彰会員（第4分科・物理学）	平成24年5月2日	享年70歳
團藤重光会員（第2分科・刑法・刑事訴訟法）	平成24年6月25日	享年98歳
乾　崇夫会員（第5分科・造船学〔船型学〕）	平成24年9月13日	享年92歳
織田敏次会員（第7分科・内科学）	平成24年9月19日	享年90歳
西田龍雄会員（第1分科・言語学）	平成24年9月26日	享年83歳
星野英一会員（第2分科・民法）	平成24年9月27日	享年86歳

＜客員＞

Andrew Huxley客員　（イギリス・神経生理学・筋生理学）平成24年5月30日　享年94歳

会員の著書紹介

- 青柳正規『逸楽と飽食の古代ローマ―「トリマルキオの饗宴」を読む』講談社（講談社学術文庫）、平成24年5月
- 小田　滋『小田滋・回想の海洋法』東信堂、平成24年5月
- 水田　洋他翻訳『アダム・スミス 法学講義 1762～1763』名古屋大学出版会、平成24年5月
- 伊藤　誠『伊藤誠著作集　第6巻　市場経済と社会主義』社会評論社、平成24年5月
- 鈴村興太郎『社会的選択の理論・序説』東洋経済新報社、平成24年6月
- 石井寛治『帝国主義日本の対外戦略』名古屋大学出版会、平成24年7月

編集後記

今回発行しました第10号のニュースレターでは、第102回日本学士院賞授賞式のほか、公開講演会や日韓学術フォーラムの様子などをお伝えします。

ご寄稿いただきました先生方や会員の皆様には心より御礼申し上げます。

さて、今年の夏は昨年にも増して暑さが厳しく感じられましたが、そんな中、ロンドンでオリンピックとパラリンピックが開催されました。日本との時差の関係で、競技が深夜から早朝にわたるものが多く、ライブで応援したい私は、期間中、寝不足状態が続きましたが、出場選手の活躍に感動と力をもらったおかげか、夏バテでダウンすることもなく、今年の夏を過ごすことができました。

今回のロンドン五輪では、日本は過去最多の38個のメダルを獲得したとのことですが、やはり金メダルの数が注目されました。「金」といえば、今年5月21日の「金環日食」を皆さんはご覧になったでしょうか。私は、近所の公園での観測会に参加し、日食メガネを通して見ましたが、感動的でした。 今年2012年は「金環日食」のほか、6月6日の「金星の太陽面通過」、8月14日の「金星食」と、オリンピックの年に「金」にちなんだ天文現象が3つも見られると話題になりました。私は「金環日食」以外は、残念ながら観測できませんでしたが、テレビ等で「金星食」等の様子を興味深く見ました。

このような珍しい天文現象の観察を機に、子どもたちの理科学習等への興味・関心を高めていってもらえればうれしく思います。

日本学士院でも今年12月8日(土)の午後に、中学生と高校生を対象とした講演会『学びのススメ「ナノサイエンスとナノテクノロジー」』を開催する予定ですので、奮ってご参加ください。

(H)

シンボルマークの由来

『古事記』において「長鳴鳥（ながなきどり）」は、知恵の神である思金神（おもいかね）が天の岩屋戸を開くために鳴かせたと記され、黎明を告げる鳥として伝えられています。本院の恩賜賞（当時）と帝国学士院賞（現日本学士院賞）の賞牌をデザインした坪井正五郎会員は、長鳴鳥に自然界の物の性質を考え究め事に応じて用いるとの意を込め図案に用いました。それ故、本院では長鳴鳥をシンボルマークとしています。

◎お問合せ先

日本学士院
〒110-0007
東京都台東区上野公園7-32
電話：　(03)3822-2101
FAX：　(03)3822-2105
E-mail：　jimu@japan-acad.go.jp

第10号：発行日：2012．10．1
（年2回　4月、10月発行）

ホームページもご覧ください。
http://www.japan-acad.go.jp/